

4. 新しい SCC 抗原測定用キット “SCC RIA BEAD” の基礎的、臨床的検討

武田 良一 小宮 妙子 一矢 有一
綾部 善治 桑原 康雄 増田 康治
(九州大・放)

SCC RIA BEAD はビーズ固相法を用いた one step サンドイッチ法による新しい SCC 抗原測定用キットであり、固相化抗体および標識抗体にモノクローナル抗体を使用している。従来より用いられている SCC RIA KIT との対比検討により、本キットの評価を行った。その結果、基礎的検討では、ほぼ満足できる結果であった。また、健常成人 76 名の平均値は 0.69 ng/ml、標準偏差は 0.47 であり、1.63 ng/ml 以下を正常域とした。臨床例における検討では、従来法と比較すると、 $r=0.987$ と良い相関を示したが、正常範囲である低値域では本キットの方がより低い値を、高値域ではより高い値を示した。本キットは、操作が簡便で測定時間も短くてすむ点でも優れており、十分に臨床使用できるものと考えられた。

5. “Owl Eye” sign, “Fish Eye” sign の ^{123}I および ^{201}Tl シンチグラムの比較検討

棚橋 信介 一矢 有一 桑原 康雄
綾部 善治 桂木 誠 増田 康治
(九州大・放)

“Owl Eye” sign とは、 ^{123}I -シンチグラムにおいて、functional nodule の中に cold area が存在する像として、1970 年に Ashker らによって報告され、また、“Fish Eye” sign は、“Owl Eye” sign とは逆に、functional area を囲むように cold area が存在する像を呈するものとして、1985年に Mercedes らによって報告されたものである。

今回、“Owl Eye” sign 4 例、“Fish Eye” sign 5 例を経験したので、 ^{201}Tl -シンチグラムとの関係を比較検討し、5 型に分類した。

手術を受けた 5 例はいずれも良性の結節性甲状腺腫であり、cold area に相当する部位には変性壊死による嚢胞形成がみられ、Ashker や Mercedes らの報告と一致した。

6. 胆道閉鎖症術後の肝シンチグラフィ

桂木 誠 (九州がんセ・放)
一矢 有一 桑原 康雄 綾部 善治
増田 康治 (九州大・放)
松尾 進 池田 恵一 (同・小児外)

胆道閉鎖症の術後患児には、肝硬変症や門脈圧亢進症が高率に合併していることが知られている。このため術後の経過観察では、胆汁の排泄状態とともに肝障害の把握が重要である。肝障害評価の目的で施行した肝シンチグラフィの検討を行った。対象は胆道閉鎖症術後 29 例 (90 検査) である。 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -phytate を用いた。シンチグラムは肝生検、食道静脈瘤の有無、ICG 値などの結果とよく一致していた。また初回の肝シンチグラフィの結果は患児の予後ある程度反映すると考えられた。肝シンチグラフィは経過観察のうえで有用な検査と思われた。

7. 前立腺癌患者の骨シンチグラフィと血清 ALP, TAP, PAP

今村 秋彦 星 博昭 陣之内正史
鮫島 仁彦 渡辺 克司 (宮崎医大・放)

確診を得た前立腺癌患者 62 例を対象として、骨転移診断における骨シンチグラフィ、血清 ALP, TAP, PAP について検討した。骨シンチグラフィは、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -MDP 25 mCi を静注し 3 時間後に全身像を撮影した。ガンマカメラは、Maxi Camera 400T, LVOV で、コリメータは、LEDP, LEGP, LEAP を使用した。骨シンチでは、62 例中 49 例に異常集積がみられ、このうち骨転移と診断したものは 40 例であった。骨シンチの sensitivity は 100%, specificity は 59% であった。血清 ALP, TAP, PAP の sensitivity は 50~73%, specificity は 77~96% であった。また、骨転移が多くなるにつれ、ALP, TAP, PAP は高値を示す傾向がみられた。